

## 富山県がん診療人材育成拠点病院としての取り組み

病院名：富山大学付属病院

### 1. 教育：人材育成・再教育に関すること

「これまでの実績」

・富山県がん診療連携協議会研修部会長病院としての取り組み

年度別研修テーマ：

2019-20 年度 がんゲノム医療、小児・AYA 世代

2021 年度 がんゲノム医療、小児・AYA 世代・妊孕性温存

2022 年度 がんゲノム医療、高齢者がん対策

特に 2022 年度は新たに「高齢者がん対策」を掲げ、高齢社会におけるがん対策を強化するための研修会を 3 回行った。

・がんゲノム医療

上述のように過去 4 年間、一貫してがんゲノム医療を県の研修テーマとして掲げ、県内啓発活動に従事している。今後も県内唯一の「がんゲノム医療拠点病院」として本県のがんゲノム医療に貢献すべく、人材育成を続けていく。具体的には毎週、院内でエキスパートパネルを開催しており、そこに係る医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、遺伝カウンセラー等多職種の on the job training の場を提供している。さらに、院外紹介例の主治医が参加しやすいようにウェブカンファレンス形式としており、他院従事者にも on the job training の機会が得られている。

・妊孕性温存

国の政策により若年がん患者の妊孕性温存事業が開始された。富山県でも「富山県がん・生殖医療ネットワーク」を構築する必要があるとあり、院内総合がんセンター内に新たに「小児・AYA 世代・妊孕性センター」を立ち上げネットワーク構築に取り組んだ。同センターでは県と協力して 2022 年度には研修会や市民公開講座を開催した。さらに、富山県がん診療連携協議会内に「小児 AYA 世代妊孕性温存部会」を設置し、県内のネットワーク構築に寄与している。

・高齢者がん対策

上述の通り 2022 年度には 3 回の研修会を行い、県内医療従事者の高齢者がん対策スキル向上に努めている。引き続きがん患者の大きな部分を占める高齢者がん対策に向けた研修事業を継続する。

## 「今後の計画」

### ・がんゲノム医療

2018 年度以来毎年研修項目に掲げ、普及啓発活動に取り組んでいる。本邦のがんゲノム医療保険収載以来約 4 年が経過し、いよいよ実効性が問われ、より多くの患者が本格利用する時代になると考えられる。毎年の活動にも関わらず、がん医療従事者全体においてがんゲノム医療に対する認識は十分ではないと思われる。がんゲノム医療のさらなる飛躍を見通し、医療従事者に対する研修会、一般市民に対する公開講座を行う。

### ・希少がん診療の強化

5 大がん等と違って年発生率が人口 10 万対 6 人以下であるがんは希少がんとされる。軟部肉腫や原発不明癌等が含まれ、がん専門の従事者でもその診療に難渋する疾患群である。希少がん診療ではよく「集約化」ということが言われるが、エキスパートは全国でも限られた数しかおらず、すべての患者を富山県から診療依頼をかけることは現実的ではない。当院では大学病院の特性を生かし、あらゆる症例にある程度対応する人材を備えている。そこで、当院を中心として希少がん症例検討会を研修会の形で開き、県内各施設の希少がん診療を支援するとともに、各施設の医療者の研修に役立てることを計画している。

### ・がん患者妊孕性温存

上述の通り、当院の「小児・AYA 世代妊孕性センター」を中心にネットワーク構築、研修事業を展開している。この事業をさらに発展・充実させるために引き続き富山県と連携をしていく。

### ・高齢者がん対策

今後ますます重要になる高齢者のがん対策研修を強化する。全国的にも重要性の認識が高まり研修会がなされており、本件でも連携をとりつつ継続していく。特に終末期、看取りといった問題が生じる本分野においては在宅緩和の役割が重要となる。この分野では本院臨床腫瘍部が連携施設と共同研究の形でデジタルツールを用いた在宅緩和診療を行っており、臨床研究を素材とした研修事業を行う予定である。

## 2. その他

(臨床や研究に関することなど)

### 「これまでの実績」

#### ・膵臓・胆道センター

全国的にも珍しい同センターでは本邦トップクラスの膵臓、胆道疾患を専門とする医師を擁し、高度先進医療を行っている。このため、全国から最も難治性疾

患の1つである膵がん患者が多く来院しハイボリュームセンターとなっている。このことから、膵・胆道系疾患診療に従事する医師が当院での研修を希望して集まってきている。

- ・乳がん先端治療・乳房再建センター

全国屈指の乳房再建技術を有する教授が就任し、これまでできなかった様々な再建手術がなされるようになった。また脂肪組織由来の幹細胞を用いた先進医療にも取り組んでおり、全国から患者が受診を希望して訪れている。膵・胆道センターと同様、乳房再建を目指す多くの医師が研修を行っている。

- ・和漢診療を取り入れた臨床研究

抗がん剤パクリタキセルは筋肉痛の副作用があり、十分に使用できない場合がある。この副作用を漢方治療により軽減して、治療効果向上を目指すことを目的とした医師主導治験を大学全体の事業として行っている。

「今後の計画」

- ・富山県がん診療連携協議会の強化

本年度に策定された第4期がん対策推進基本計画に掲げられた、がん診療連携協議会機能の強化を図る。これまで、同協議会は各部会事業に分かれて県のがん診療連携に一定の役割を担ってきたが、患者への実質的な効果還元的面では、改善の余地があると考えられる。そこで、今年度より「希少がん症例検討会」を研修部会に立ち上げ、富山県内の各がん診療連携拠点病院が共同して診療に加わる仕組みを構築する。症例検討により単施設ではかなわなかったより高度な医療提供につながることはもちろん、定期開催により各施設の医療従事者がより密接にかかわることにより、これまでにない連携関係の構築が期待される。

- ・がんゲノム医療

上述のように今後ますます重要性が増すと考えられるがんゲノム医療の充実を図るため、研修会の継続と、富山県がん診療連携協議会での啓発活動も行っていく。そして、必要に応じて新たな部会の設置も検討する。

- ・チーム医療の充実

極度に高度先進化するがん診療ではもはや主治医1人が一人の患者を診るということは不可能に近い。このため多職種によるチーム医療の構築が欠かせない。緩和ケアの分野では早くから緩和ケアチームが構築され、あらゆる医療職スタッフが協力して患者ケアにあたってきた。これと同様に、抗がん化学療法、がんゲノム医療、アピアランスケアなど、様々な分野でチーム医療を構築する必要がある。こうしたチーム教育を行う研修会を企画する。